

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：20104

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12970

研究課題名（和文）日本への導入を目指した反レイシズム・ソーシャルワーク実践モデルの開発的研究

研究課題名（英文）Developmental Study of Anti-Racism Social Work Practice Model for Introducing Into Japan

研究代表者

宮崎 理（Miyazaki, Osamu）

名寄市立大学・保健福祉学部・講師

研究者番号：50770020

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：イギリスの反レイシズム・ソーシャルワークで用いられてきた「制度的レイシズム（institutional racism）」概念は、在日朝鮮人を主要なターゲットとしたレイシズムが問題となっている日本においても、ソーシャルワーク実践に有用な視座である。それは、社会全体の中に埋め込まれたレイシズムを問題化したり、ソーシャルワーカーが持っているレイシズムを省察したりすることに役立つ。しかし、個々の実践において、レイシズムのみに焦点を当てて抑圧を捉えることには限界がある。構造的な問題としてのレイシズムに焦点を当てつつ、ジェンダーやセクシュアリティなど他の構造的な要因も同時に捉えるような視座が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、イギリスで取り組まれてきた反レイシズム・ソーシャルワークの理論と実践を参照しながら、日本において反レイシズムのソーシャルワーク実践を展開するために必要な理論の一端を提示した。このことは、レイシズムの克服が日本社会全体の課題となっているなかであって、その推進のための実践理論をソーシャルワークにもたらすという社会的意義を持つ。また、本研究で焦点を当てた在日朝鮮人を主要なターゲットにしたレイシズムは、日本のソーシャルワークにおいてあまり注目されてこなかったものである。本研究は、同テーマに関する研究の推進に寄与するという学術的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：The concept of "institutional racism" used in the British Anti-Racism Social Work is useful for the social work practice in Japan as well, where the racism targeting mainly "Zainichi Korean" (Korean residents in Japan) is a serious social issue. It helps one to focus on the racism embedded in the whole society and to reflect on the racist views which social workers have. In individual practices, however, there are limitations to focusing solely on racial oppression. It is necessary to have a perspective which captures other structural factors like gender and sexuality while focusing on racism as a structural problem.

研究分野：社会福祉学、ソーシャルワーク論

キーワード：反レイシズム・ソーシャルワーク ソーシャルワーク レイシズム 実践理論 実践モデル 日本 イギリス 在日朝鮮人

1. 研究開始当初の背景

2000年代後半以降、日本において在日朝鮮人を主要な標的としたヘイトスピーチが社会問題化するなか、レイシズム(人種・民族差別)は、克服が必要な社会的課題の一つとして論じられるようになった。しかし、日本のソーシャルワークでは、レイシズムを克服することの必要性が認識され、そのための十分な実践が展開されているとは言い難い。その理由の一つとして、ソーシャルワーク教育の中に、レイシズムを適切に捉えるための実践モデルが取り入れられていないことが挙げられる。

日本のソーシャルワークにおいて、レイシズムに関する言及はほとんど見られないが、イギリスでは、反レイシズム・ソーシャルワーク(Anti-Racism Social Work)が実践されてきた。反レイシズム・ソーシャルワークの特徴として、以下の点が挙げられる(宮崎 2016)。

- ・ 反レイシズム・ソーシャルワークは、1970年代から1980年代前半に、イギリスのソーシャルワーカーたちが、反レイシズムのさまざまな社会運動に参加したことを契機として生まれた。
- ・ レイシズムは社会的に構築されたものであり、レイシストによるあからさまな言動だけでなく、明文化された法制度から日常生活の細部に至るまで、社会に深く組み込まれた「制度」(institution)として概念付けられる。
- ・ ソーシャルワーカーが、自身の価値観や言動に潜むレイシズムを自覚し変革することの必要性が認識され、ソーシャルワーク教育のカリキュラムの中に、反レイシズム・ソーシャルワークの理論と実践に関する学びが公的に取り入れられてきた。

日本のソーシャルワークにとって、イギリスの反レイシズム・ソーシャルワークの理論と実践は参考となるものである。特に、ソーシャルワーカー自身のレイシズムを克服するために、レイシズムを「制度」(institution)として捉える視座は有用であると考えられる。しかし、日本のソーシャルワーク教育に取り入れるためには、日本独自の社会状況や、歴史的背景、政治的側面、文化的側面等を視野に入れた実践モデルを提示する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、イギリスの反レイシズム・ソーシャルワークの理論と実践を参照するとともに、在日朝鮮人の当事者ワーカーを中心に取り組まれてきたレイシズム克服のための実践を理論化し、日本のソーシャルワーク教育への導入を目指した反レイシズム・ソーシャルワーク実践モデルを提示することを目的とする。

その目的を達成するために、以下の3つのテーマを設定して研究を行う。イギリスの反レイシズム・ソーシャルワークを理論的に整理するとともに、ソーシャルワーク教育における位置付けを把握する。日本におけるレイシズムとその克服を目指したソーシャルワーク実践の現状を明らかにする。日本のソーシャルワーク教育へ取り入れることを目指し、反レイシズム・ソーシャルワークを理論化・モデル化する。

3. 研究の方法

本研究は、芝野松次郎(2002)が提唱したM-D&D(Modified Design and Development)の手法を援用して進める。M-D&Dは、「問題の把握と分析」「叩き台のデザイン」「試行と改良」「普及と訴え」の4つのフェーズから成る。本研究では、まず、実践モデル開発に有用な知見をイギリスの理論から得る。そのうえで、日本のレイシズムに関する「問題の把握と分析」を行う。そして、問題の詳細な調査把握と実践現場の個別状況を踏まえ、「叩き台のデザイン」「試行と改良」を行い、研究成果の公表を通して「普及と訴え」を行う。

4. 研究成果

研究期間全体を通して得られたデータの一部は、分析途中の段階である。また、COVID-19大流行の影響を受け、調査の実施が限定的となったため、実践モデルについては検討中である。

研究成果を年度ごとに挙げると、以下の通りである。

(1) 2018年度の研究成果

2018年度は、主としてイギリスの反レイシズム・ソーシャルワークの理論に関する文献を収集し吟味した。特に、反レイシズム・ソーシャルワークにおいて、レイシズムがどのようなものとして捉えられているのか検討した結果、つぎのことが明らかになった。

まず、レイシズムは多次元的なものとして捉えられている。それは、Personal (individual) racism (個人的レイシズム)、Institutional racism (制度的レイシズム)、Cultural racism

(文化的レイシズム)の3つの次元である。そして、それら3つの次元に分けられるレイシズムは、ダイナミックなものとして捉えられている。例えばL. Dominelliは、「レイシズムは、社会的に構築されたものであり、日常生活と専門職による実践の細部に埋め込まれ、交渉しあう3つの相互作用的要素(personal, institutional, cultural)で構成される多次元的な抑圧の形である」と述べている(Dominelli 2018: 18)。

こうしたレイシズムの捉え方は日本においても応用可能であり、個別に問題化されることの多い制度・政策的な次元のレイシズムと、ヘイトスピーチのような個人的な次元のレイシズムを、相互に関連づけて把握することに役立つ。

また、反抑圧ソーシャルワークや反差別ソーシャルワーク、フェミニスト・ソーシャルワークなどに関する国内外の先行研究についても検討を行った。その結果、それらのソーシャルワーク実践理論から有用な知見を得ることができた。特に、反抑圧ソーシャルワークの先行研究で指摘されているソーシャルワークの「非政治化」(depoliticization)の問題は、反レイシズムの観点からも、その問題化と克服が重要である。

(2) 2019年度の研究成果

2019年度は、前年度から継続してイギリスの反レイシズム・ソーシャルワークの理論に関する文献を収集し吟味した。特に、前年度明らかにした反レイシズム・ソーシャルワークにおけるレイシズムを捉える特徴的な概念のうち、「制度的レイシズム(institutional racism)」に焦点を当て、その意義を日本のソーシャルワーク実践を意識しながら明確化した。この研究成果は、「反レイシズム・ソーシャルワークのパースペクティブ」と題した論文を雑誌に寄稿して公表した。

また、反レイシズム・ソーシャルワークで用いられている「制度的レイシズム」概念の導入経緯と歴史的な位置づけについて検討した。同概念を初めて提唱したアメリカ合衆国のStokely Carmichaelらの著書“Black Power”(1967)などを検討し、当時の理論的・社会的文脈を把握することができた。そして、イギリスのRobert Milesの著書“Racism”(1989)などを参照し、「制度的レイシズム」概念の意義のみならず限界についても考察することができた。それに加えて、Gurnam Singhらの著書“Anti-Racist Social Work: International Perspectives”(2019)などから、近年の反レイシズム・ソーシャルワークの理論と実践の動向について、国際的な視野で把握することもできた。

(3) 2020年度の研究成果

2020年度は、covid-19大流行の影響を受け、海外渡航ができなくなってしまった。また、日本国内での調査も限定的なものとならざるを得なかった。ゆえに、当初の研究計画から大幅な変更を余儀なくされた。そのようななか、引き続き反レイシズム・ソーシャルワークの理論研究を進めた。2020年5月に警察官による黒人男性殺害事件が米国で発生し、それに端を発してBlack Lives Matter運動(BLM)が拡大したことは、本研究の遂行にも大きなインパクトを与えた。

まず、それら一連の出来事を契機に国内外で交わされた、レイシズムに関する諸議論を検討した。また、オーストリアやフランスなどのヨーロッパ諸国にも範囲を広げ、それらの国々のソーシャルワーク領域における反レイシズムの理論と実践について一定程度文献を検討することができた。こうした理論研究の遂行によって、本研究で当初より焦点を当ててきた「制度的レイシズム」概念の有用性をより深く認識した。

また、限定的ではあったものの、日本におけるレイシズムの一端を明らかにすることを目的として、在日朝鮮人女性にインタビュー調査を実施することができた。この調査の結果、「交差性(intersectionality)」概念を導入することによって、レイシズムだけでなく複数の抑圧を同時に問題化することの必要性を明らかにした。

文献

Carmichael, Stokely and Hamilton, Charles V. (1967) *Black Power: Politics of Liberation in America*, Jonathan Cape Ltd.

Dominelli, Lena (2018) *Anti-Racist Social Work*, 4th ed. Red Globe Press.

Miles, Robert (1989) *Racism*, Routledge.

宮崎理(2016)「イギリスにおける反レイシズム・ソーシャルワークに関する一考察：実践の社会的背景とレイシズム概念の諸特徴」『旭川大学保健福祉学部研究紀要』8、53-59。

芝野松次郎(2002)『社会福祉実践モデル開発の理論と実際：プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』有斐閣。

Singh, Gurnam and Masocha, Shepard eds. (2019) *Anti-Racist Social Work: International Perspectives*, Red Globe Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 宮崎 理	4. 巻 44(3)
2. 論文標題 社会的に排除されるものとソーシャルワークの価値	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 205-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 理	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 現代社会における多次元のレイシズムを捉える視座：反レイシズム・ソーシャルワークの知見を手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 理	4. 巻 22(3)
2. 論文標題 反レイシズム・ソーシャルワークのパーспекティブ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 72-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Osamu Miyazaki	4. 巻 23
2. 論文標題 Intersectionality in Japan: Considering the Oppression of Zainichi Korean Women through the Lens of Black Feminism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Social Dialogue: International Association of Schools of Social Work Magazine	6. 最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 理	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 ベル・フックスの「関係性の教育学」における「当事者性」：社会的排除・抑圧を克服するためのソーシャルワーク教育への示唆	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 142-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮崎 理
2. 発表標題 現代社会における多次的レイシズムを捉える視座
3. 学会等名 関係性の教育学会第16回（2018）年次大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関